

佛敎大学大学院紀要 文学研究科篇 第37号 (2009年3月)

「パーリ律」捨墮法に説かれる羯磨

THAN VAN VAN

〔抄 録〕

捨墮法の基本的性格が「所有してはならない物品への対応」であるため、いずれの場合にも衣・鉢・敷具・羊毛・雨浴衣・薬・金銀等の「物品」をどのように「捨する」かが問題となるが、「パーリ律」はその全ての場合に羯磨によって対応すべきであることを明確に示している。従って、「パーリ律」捨墮法は、それぞれの羯磨と密接な関わりを有するものとして形成されていることになる。ただし、羯磨の具体的な内容を見た場合には、物品の名称を変えるだけで対応できる形式を整えており、律本文には省略された形で反復されているだけである。従って「パーリ律」捨墮法には三十二羯磨と数えられるものの、実質的には六種にまとめられることになる。

キーワード 捨墮法、羯磨、淨施、執事人、長衣

捨墮法 (nissaggiya-pācittiya-dhamma) とは、「比丘が所有を禁止されている物を所有していた場合に、罪に触れた物を放棄 (捨) して、さらに「墮」の罪になる」というものである⁽¹⁾。具体的には捨墮罪に触れた物を放棄して、清浄な比丘の前で犯した罪を発露して懺悔する。それで罪は清められる。金銀銭等のごとく、比丘の所有が許されていないものは本人に返還されないが、それ以外の物は、放棄した後に原則として本人に返還される。その際には返還のための手続きが必要とされるが、「パーリ律」は羯磨という形式でそれを示している。

律蔵に散見される羯磨 (kamma) とは、一般的に「僧団の全体会議を意味する言葉である」と説明され⁽²⁾、その種類には白羯磨 (ñatti-kamma)、白二羯磨 (ñattidutiya-kamma)、白四羯磨 (ñatticatuttha-kamma) の三種類があるとされる。白羯磨はサンガへの告知だけで、承認の必要がないものである。白二羯磨は議案の提議を一回唱えた後、その議案の提議に対して一回だけ承認の可否をサンガの全員に問い、一人も反対者がなければ可決されるものである。白四羯磨は議案の提議を一回唱えた後、その議案の提議に対して三回にわたって承認の可否をサンガの全員に問い、一人も反対者がなければ可決されるものである。この三種類の羯磨は、諸広律において名称に関しては多少異なるものの、共通して説かれている。この他、『摩訶僧祇律』には求聴羯磨が説かれている。求聴羯磨は、『摩訶僧祇律』固有の特徴で、主に当該の

者の乞い求めを認めるためのものであり、形式としては白羯磨と相当する。

「パーリ律」捨墮法の部分では、先に示した返還の手続きとして、三十の条項すべてに関連して羯磨が説かれている。しかし、羯磨そのものの研究と同様、この点に着目し、「パーリ律」捨墮法における羯磨の具体的内容や特徴についてまとめた研究は存在しない。そこで、本小論では、特に「パーリ律」捨墮法中に説かれる羯磨に注目し、三十二種に及ぶ全ての事例を取り上げ、その特徴等について若干の考察を行ってみたい。

(1) 捨墮法第1条「長衣過限戒」における羯磨⁽³⁾

捨墮法第1条では、衣(cīvara)を返還することを告知するための白羯磨が説かれている。比丘が所持している三衣以外の余分の衣(および衣の材料となる布)は「長衣」(atireka-cīvara)と呼ばれており、「作衣時」(cīvara-kāra-samaya)⁽⁴⁾を除いて、十日間に限って、所持することが認められている。それ故、「長衣」を得た場合、「浄施」(vikappanā)⁽⁵⁾をしなければ、十日が過ぎるとその「長衣」は捨墮罪に触れることになる。捨墮罪を犯した比丘は、その衣をサンガ(saṃgha)、或いは数人の比丘達(gaṇa)、或いは一人の比丘(puggala)に対して、一旦放棄して懺悔をするが、その後にサンガの場合には有能で聡明な比丘がその罪の懺悔を受けてから白羯磨を提唱して、その衣を、捨墮罪を犯した比丘に返還する。このように、一旦放棄された衣を、その放棄した比丘に返還することを告知するための白羯磨が、ここでは説かれている。具体的な羯磨文は以下の通りである。

“suṇātu me bhante saṃgho. idaṃ cīvaraṃ itthannāmassa bhikkhuno nissaggiyaṃ saṃghassa nissatṭhaṃ. yadi saṃghassa pattakallaṃ, saṃgho imaṃ cīvaraṃ itthannāmassa bhikkhuno dadeyyā” ti. (PTS. Vin. III 196.31-34)⁽⁶⁾

「大徳よ、サンガはお聞きください。某甲比丘の放棄すべきこの衣が、サンガに放棄されました。もしサンガにとって時機適切ならば、サンガはこの衣を某甲比丘に与えてください。」

(2) 捨墮法第2条「離三衣戒」における二つの羯磨

(2-1) 「不失三衣許可」(ti-cīvara-avippavāsa-sammuti) を与えるための白二羯磨

比丘は、三衣の内のいずれの衣であっても、それと離れて夜を越してはならないという規則が、捨墮第2条に示される「離三衣戒」である。三衣全てを所持して外出することができない病氣等の比丘が、その規則の適用を免れるためには、先ずサンガに対して「不失三衣許可」を三回にわたって乞い求める。これを受けて、有能で聡明な比丘がこの白二羯磨を提唱して、病氣等の比丘に「不失三衣許可」を与える。この白二羯磨によって、病氣等の比丘は、三衣のい

ずれかと離れて夜を越しても、捨墮罪を犯すことにならず、その三衣もサンガ等に放棄される必要がなくなる。具体的な羯磨文は以下の通りである。

“suṇātu me bhante saṃgho. ayam itthannāmo bhikkhu gilāno na sakkoti ticīvaraṃ ādāya pakkamituṃ. so saṃghaṃ ticīvarena avippavāsasammutiṃ yācati. yadi saṃghassa pattakallaṃ, saṃgho itthannāmassa bhikkhuno ticīvarena avippavāsasammutiṃ dadeyya.” esā ñatti.

“suṇātu me (bhante saṃgho. ayam itthannāmo bhikkhu gilāno na sakkoti ticīvaraṃ ādāya pakkamituṃ. so saṃghaṃ ticīvarena avippavāsasammutiṃ) yācati. saṃgho itthannāmassa bhikkhuno ticīvarena avippavāsasammutiṃ deti. yassāyasmato khamati itthannāmassa bhikkhuno ticīvarena avippavāsasammutiyaṃ dānaṃ, so tuṃh’ assa; yassa na kkhamati so bhāseyya.”

“dinnā saṃghena itthannāmassa bhikkhuno ticīvarena avippavāsasammuti, khamati (saṃghassa, tasmā tuṃhī, evam etam) dhārayāmī” ti. (PTS. Vin. III 199.12-22)

「大徳よ、サンガはお聞きください。この病気である某甲比丘は、三衣を所持して外出することができません。彼はサンガに対して「不失三衣許可」を乞い求めます。もしサンガにとって時機適切なら、サンガは某甲比丘に「不失三衣許可」を与えてください。」

これが白（提議）である。

「(大徳よ、) サンガはお聞きください。(この病気である某甲比丘は、三衣を所持して外出することができません。彼はサンガに対して「不失三衣許可」を) 乞い求めています。サンガは某甲比丘に「不失三衣許可」を与えます。諸大徳の中で、某甲比丘に「不失三衣許可」を与えることを承認してくださる方は、そのまま沈黙を守ってください。承認しない方は発言してください。」

「サンガによって某甲比丘に「不失三衣許可」が与えられました。(サンガは) 承認しました。(沈黙が守られたゆえに。以上の通り、このことを私は) 確認いたします⁽⁷⁾。」

(2-2) 三衣 (ti-cīvara) を返還することを告知するための白羯磨

直前に述べた「不失三衣許可」を受けないまま、三衣と離れて夜を越したならば、その三衣は捨墮罪に触れることになる。そして、その三衣は捨墮法第1条に述べた手順と同じく為された後、この三衣を返還することを告知するための白羯磨が実施されて、捨墮罪を犯した比丘に返還される。この白羯磨は捨墮法第1条におけるものと「衣」が「三衣」に代わるだけで、殆ど同じであるため、羯磨の内容は省略されている⁽⁸⁾ (PTS. Vin. III 200.3)。

(3) 捨墮法第 3 条「月望衣戒」における羯磨

捨墮法第 3 条では、非時衣 (akāla-civara) を返還することを告知するための白羯磨が説かれている。捨墮法第 1 条に述べたように、比丘は「作衣時」を除いて、十日間だけ、余分の衣 (および衣の材料となる布) を所持することが認められている。しかし、それだけで一枚の衣を作るには布が不足する場合に、別の布を入手する可能性があるならば、一ヶ月間、その衣 (および衣の材料となる布) を所持することが認められている。一ヶ月が過ぎると、その衣は非時衣として捨墮罪に触れることになる。そして、その非時衣は捨墮法第 1 条に述べた手順と同じく為された後、この非時衣を返還することを告知するための白羯磨が実施されて、捨墮罪を犯した比丘に返還される。この白羯磨は捨墮法第 1 条におけるものと「衣」が「非時衣」に代わるだけで、殆ど同じであるため、その内容は省略されている (PTS. Vin. III 205.3)。

(4) 捨墮法第 4 条「使非親尼浣故衣戒」における羯磨

捨墮法第 4 条では、古い衣 (purāṇa-civara) を返還することを告知するための白羯磨が説かれている。比丘は自分の親戚ではない比丘尼に、自分の古い衣を洗濯させてはならない。親戚ではない比丘尼によって洗濯された古い衣は捨墮罪に触れることになる。そして、その古い衣は捨墮法第 1 条に述べた手順と同じく為された後、この古い衣を返還することを告知するための白羯磨が実施されて、捨墮罪を犯した比丘に返還される。この白羯磨は捨墮法第 1 条におけるものと「衣」が「古い衣」に代わるだけで、殆ど同じであるため、その内容は省略されている (PTS. Vin. III 206.36)。

(5) 捨墮法第 5 条「受非親尼衣戒」における羯磨

捨墮法第 5 条でも、衣を返還することを告知するための白羯磨が説かれている。比丘は親戚ではない比丘尼から衣を貰い受けてはならない。親戚ではない比丘尼から貰い受けられた衣は捨墮罪に触れることになる。そして、その衣は捨墮法第 1 条に述べた手順と同じく為された後、この衣を返還することを告知するための白羯磨が実施されて、捨墮罪を犯した比丘に返還される。この白羯磨は、捨墮法第 1 条におけるものと同じであるため、その内容は省略されている (PTS. Vin. III 210.9)。

(6) 捨墮法第 6 条「従非親在家乞衣戒」における羯磨

捨墮法第 6 条でも、衣を返還することを告知するための白羯磨が説かれている。比丘は親戚

ではない在家者に対して衣を乞い求めてはならない。親戚ではない在家者に衣を乞い求め、衣が入手されたならば、その衣は捨墮罪に触れることになる。そして、その衣は捨墮法第1条に述べた手順と同じく為された後、この衣を返還することを告知するための白羯磨が実施されて、捨墮罪を犯した比丘に返還される。この白羯磨は、捨墮法第1条におけるものと同じであるため、その内容は省略されている (PTS. Vin. III 213.15)。

(7) 捨墮法第7条「過量乞衣戒」における羯磨

捨墮法第7条でも、衣を返還することを告知するための白羯磨が説かれている。直前に述べたように比丘は親戚ではない在家者に対して衣を乞い求めてはならない。しかし衣が奪われたり、衣を失ったりした場合には親戚ではない在家者に対して乞い求めることが認められている。それを理由にして過度の量の衣を乞い求め⁽⁹⁾、衣が入手されたならば、その衣は捨墮罪に触れることになる。そして、その衣は捨墮法第1条に述べた手順と同じく為された後、この衣を返還することを告知するための白羯磨が実施されて、捨墮罪を犯した比丘に返還される。この白羯磨は、捨墮法第1条におけるものと同じであるため、その内容は省略されている (PTS. Vin. III 215.2)。

(8) 捨墮法第8条「不受請前乞衣戒」における羯磨

捨墮法第8条でも、衣を返還することを告知するための白羯磨が説かれている。親戚ではない在家者が、ある比丘に衣を布施しようと、「衣料」(civara-cetāpana)⁽¹⁰⁾を用意している際に、比丘がそのことを知り、よりよい衣を得ようと、その在家者のところへ行って、「私に衣を布施するならば、このような衣を布施して欲しい」と指示して、指示通りの衣を入手したならば、その衣は捨墮罪に触れることになる。そして、その衣は捨墮法第1条に述べた手順と同じく為された後、この衣を返還することを告知するための白羯磨が実施されて、捨墮罪を犯した比丘に返還される。この白羯磨は、捨墮法第1条におけるものと同じであるため、その内容は省略されている (PTS. Vin. III 217.12)。

(9) 捨墮法第9条「勸二家増衣価戒」における羯磨

捨墮法第9条でも、衣を返還することを告知するための白羯磨が説かれている。ある比丘に、二人の、親戚ではない在家者が、それぞれ別々に「衣料」を用意して、衣を布施しようとしている際に、そのことを聞いた比丘が、それぞれの在家者の家に行き、二人の用意した「衣料」を一つにして立派な衣を布施するよう説き勧め、衣を入手したならば、その衣は捨墮罪

に触れることになる。そして、その衣は捨墮法第1条に述べた手順と同じく為された後、この衣を返還することを告知するための白羯磨が実施されて、捨墮罪を犯した比丘に返還される。この白羯磨は、捨墮法第1条におけるものと同じであるため、その内容は省略されている (PTS. Vin. III 219.20)。

(10) 捨墮法第10条「過限索衣戒」における羯磨

捨墮法第10条でも、衣を返還することを告知するための白羯磨が説かれている。比丘は金銭を所有することは許されないで、信者から「衣料」を布施された場合には、比丘の執事人 (veyyāvacca-kara)⁽¹¹⁾にそれを預けておく。比丘は衣を必要とする時には、執事人のもとへ行って「私は衣が必要である」と二度、三度督促し、「衣料」のことを思い出させることができる。それでも衣を得ることができなかったならば、さらに執事人のもとへ行って三度、沈然して、立つことができる。もしそれ以上催促して、衣を得たならば、その衣は捨墮罪に触れることになる。そして、その衣は捨墮法第1条に述べた手順と同じく為された後、この衣を返還することを告知するための白羯磨が実施されて、捨墮罪を犯した比丘に返還される。この白羯磨は、捨墮法第1条におけるものと同じであるため、その内容は省略されている (PTS. Vin. III 223.12)。

(11) 捨墮法第11条「雑絹絲作敷具戒」における羯磨

捨墮法第11条では、敷具 (santhata) を返還することを告知するための白羯磨が説かれている。比丘が、羊毛等に絹を混ぜて敷具を作り、その敷具はできたならば、捨墮罪に触れることになる。そして、その敷具は捨墮法第1条に述べた手順と同じく為された後、この敷具を返還することを告知するための白羯磨が実施されて、捨墮罪を犯した比丘に返還される。この白羯磨は捨墮法第1条におけるものと「衣」が「敷具」に代わるだけで、殆ど同じであるため、その内容は省略されている (PTS. Vin. III 224.34)。

(12) 捨墮法第12条「純黒羊毛作敷具戒」における羯磨

捨墮法第12条でも、敷具を返還することを告知するための白羯磨が説かれている。比丘が、純黒の羊毛で敷具を作り、その敷具はできたならば、捨墮罪に触れることになる。そして、その敷具は捨墮法第1条に述べた手順と同じく為された後、この敷具を返還することを告知するための白羯磨が実施されて、捨墮罪を犯した比丘に返還される。この白羯磨は捨墮法第1条におけるものと「衣」が「敷具」に代わるだけで、殆ど同じであるため、その内容は省略されて

いる (PTS. Vin. III 226.4)。

(13) 捨墮法第13条「雑色羊毛作敷具戒」における羯磨

捨墮法第13条でも、敷具を返還することを告知するための白羯磨が説かれている。比丘が、新しい敷具を作る時、純黒の羊毛を四分の二、白色の羊毛を四分の一、褐色 (gocariya) の羊毛を四分の一の割合で混入させて作らなかったならば、その敷具は捨墮罪に触れることになる。そして、その敷具は捨墮法第1条に述べた手順と同じく為された後、この敷具を返還することを告知するための白羯磨が実施されて、捨墮罪を犯した比丘に返還される。この白羯磨は捨墮法第1条におけるものと「衣」が「敷具」に代わるだけで、殆ど同じであるため、その内容は省略されている (PTS. Vin. III 227.8)。

(14) 捨墮法第14条「減六年作敷具戒」における二つの羯磨

(14-1) 病比丘に「敷具許可」(santhata-sammuti) を与えるための白二羯磨

比丘は敷具を最低でも六年間、使用しなければならない。もし六年以内に新しい敷具を作ったならば、捨墮罪を犯すことになる。しかし病比丘に限っては、敷具を持って移動するのが困難である場合には、六年に満たなくても、平素使用している敷具を捨てて、目的地へ行行ってから新しい敷具を作ることが許可されている。その許可を与えるための白二羯磨が、ここでは説かれている。先ず、病比丘はサンガに対して「敷具許可」を三回にわたって乞い求める。これを受けて、有能で聡明な比丘が白二羯磨を提唱して、病比丘に「敷具許可」を与える。具体的な羯磨文は以下の通りである。

“suṇātu me bhante saṃgho. ayam itthannāmo bhikkhu gilāno na sakkoti santhataṃ ādāya pakkamituṃ. so saṃghaṃ santhatasammutiṃ yācati. yadi saṃghassa patta-kallaṃ, saṃgho itthannāmassa bhikkhuno santhatasammutiṃ dadeyya”. eṣā ñatti.

“suṇātu me bhante saṃgho. ayam (itthannāmo bhikkhu gilāno na sakkoti santhatasammutiṃ ādāya pakkamituṃ. so saṃghaṃ) santhatasammutiṃ yācati. saṃgho itthannāmassa bhikkhuno santhatasammutiṃ deti. yassāyasmato khamati itthannāmassa bhikkhuno santhatasammutiyā dānaṃ so tuṇh’ assa, yassa na kkhamaṭi so bhāseyya.”

“dinnā saṃghena itthannāmassa bhikkhuno santhatasammuti, khamati (saṃghassa, tasmā tuṇhī, evaṃ etaṃ) dhārayāmi” ti. (PTS. Vin. III 228.33-229.6)

「大徳よ、サンガはお聞きください。この病気である某甲比丘は、敷具を所持して外出することができません。彼はサンガに対して「敷具許可」を乞い求めます。もしサンガにと

って時機適切なら、サンガは某甲比丘に「敷具許可」を与えてください。」

これが白（提議）である。

「(大徳よ、) サンガはお聞きください。この(病気である某甲比丘は、敷具を所持して外出することができません。彼はサンガに対して)「敷具許可」を乞い求めています。サンガは某甲比丘に「敷具許可」を与えます。諸大徳の中で、某甲比丘に「敷具許可」を与えることを承認してくださる方は、そのまま沈黙を守ってください。承認しない方は発言してください。」

「サンガによって某甲比丘に「敷具許可」が与えられました。(サンガは) 承認しました。

(沈黙が守られたゆえに。以上の通り、このことを私は) 確認いたします⁽¹²⁾。」

(14-2) 敷具を返還することを告知するための白羯磨

六年以内に新しい敷具を作ったならば、その敷具は捨墮罪に触れることになる。そして、その敷具は捨墮法第1条に述べた手順と同じく為された後、この敷具を返還することを告知するための白羯磨が実施されて、捨墮罪を犯した比丘に返還される。その白羯磨は、捨墮法第1条におけるものと「衣」が「敷具」に代わるだけで、殆ど同じであるため、その内容は省略されている (PTS. Vin. III 229.25)。

(15) 捨墮法第15条「不貼坐具戒」における羯磨

捨墮法第15条では、坐具・敷具 (nisidana-santhata) を返還することを告知するための白羯磨が説かれている。比丘は新しい坐具・敷具を作る場合には、「壊色」(dubbaṇṇa-karaṇa) のために、古いものから古い布を切り取り、それを新しい坐具・敷具に貼り付けなければならない。それをしなかったならば、新調された坐具・敷具は捨墮罪に触れることになる。そして、その坐具・敷具は捨墮法第1条に述べた手順と同じく為された後、この坐具・敷具を返還することを告知するための白羯磨が実施されて、捨墮罪を犯した比丘に返還される。この白羯磨は捨墮法第1条におけるものと「衣」が「坐具・敷具」に代わるだけで、殆ど同じであるため、その内容は省略されている (PTS. Vin. III 232.35)。

(16) 捨墮法第16条「自担羊毛過限戒」における羯磨

捨墮法第16条では、羊毛 (eḷaka-loma) を返還することを告知するための白羯磨が説かれている。比丘は、信者から羊毛を布施された場合に、三由旬 (ti-yojana) 以下の距離を、自ら運び行くことが認められているが、三由旬を超えて運び行ったら、その羊毛は捨墮罪に触れることになる。そして、その羊毛は捨墮法第1条に述べた手順と同じく為された後、この

羊毛を返還することを告知するための白羯磨が実施されて、捨墮罪を犯した比丘に返還される。この白羯磨は捨墮法第1条におけるものと「衣」が「羊毛」に代わるだけで、殆ど同じであるため、その内容は省略されている (PTS. Vin. III 234.19)。

(17) 捨墮法第17条「使非親尼染羊毛戒」における羯磨

捨墮法第17条でも、羊毛を返還することを告知するための白羯磨が説かれている。比丘は、親戚ではない比丘尼に自分の羊毛を洗濯させたり、染めさせたり、梳かせたりしたならば、その羊毛は捨墮罪に触れることになる。そして、その羊毛は捨墮法第1条に述べた手順と同じく為された後、この羊毛を返還することを告知するための白羯磨が実施されて、捨墮罪を犯した比丘に返還される。この白羯磨は捨墮法第1条におけるものと「衣」が「羊毛」に代わるだけで、殆ど同じであるため、その内容は省略されている (PTS. Vin. III 236.4)。

(18) 捨墮法第18条「受畜金銀戒」における羯磨

捨墮法第18条では、金銀を捨てる比丘 (rūpiya-chaḍḍaka-bhikkhu) を選出するための白二羯磨が説かれている。この条文以前の諸条文で取りあげてきた衣や敷具等の場合には、捨墮罪を犯した比丘は、その所有を放棄して、サンガ等に捨てて、正しいやり方で懺悔をし、そしてその後、羯磨を通じて、放棄した物は、捨墮罪を犯した比丘に返還されることになっていた。しかし、ここで規定されている金銀 (rūpiya)⁽¹³⁾ の場合は、それらとは異なる。先ず、放棄する相手は、必ずサンガでなければならない。そして、金銀というのは、本来、所有を認められていないものであるから、正しいやり方で懺悔をしても、その金銀は捨墮罪を犯した比丘に返還されない。サンガに放棄されたその金銀は、信頼に値するアーラーミカ (ārāmika)⁽¹⁴⁾ 或いは優婆塞が来た時に、彼らに渡す。そして、その金銀を受け取ったアーラーミカ或いは優婆塞が、比丘達のために、それらの金銀を、熟酥 (sappi)・油 (tela)・蜜 (madhu)・石蜜 (phāṇita) 等に交換して持ってきたならば、金銀の所持によって捨墮罪を犯した比丘を除いて、残りの比丘達がそれらを受用することが許されている。またアーラーミカ或いは優婆塞がその金銀を熟酥・油・蜜・石蜜等に交換することができない場合は、彼らに金銀を深い谷等に捨ててもらう。それでもできなかったならば、有能で聡明な比丘が白二羯磨を提唱して、五つの支分 (pañca-aṅga)⁽¹⁵⁾ を有する比丘をその金銀を捨てる比丘として選出する。具体的な羯磨文は以下の通りである。

“suṇātu me bhante saṃgho. yadi saṃghassa pattakallaṃ, saṃgho itthannāmaṃ bhikkhuṃ rūpiyachaḍḍakaṃ sammanneyya.” esā ñatti.

“suṇātu me bhante saṃgho. saṃgho itthannāmaṃ bhikkhuṃ rūpiyachaḍḍakaṃ

sammannati. yassāyasmato khamati itthannāmassa bhikkhuno rūpiyachaḍḍakassa sammuti so tuṇh’ assa, yassa na kkhamati so bhāseyya.”

“sammato saṃghena itthannāmo bhikkhu rūpiyachaḍḍako, khamati (saṃghassa, tasmā tuṇhī, evam etam) dhārayāmi” ti. (PTS. Vin. III 238.29-36)。

「大徳よ、サンガはお聞きください。もしサンガにとって時機適切なら、サンガは某甲比丘を、金銀を捨てる比丘として選出してください。」

これが白（提議）である。

「大徳よ、サンガはお聞きください。サンガは某甲比丘を、金銀を捨てる比丘として選出します。諸大徳の中で、某甲比丘を金銀を捨てる比丘として選出することを承認して下さる方は、そのまま沈黙を守ってください。承認しない方は発言してください。」

「サンガによって某甲比丘が、金銀を捨てる比丘として選出されました。(サンガは) 承認しました。(沈黙が守られたゆえに。以上の通り、このことを私は) 確認いたします⁽¹⁶⁾。」

(19) 捨墮法第19条「貿易金銀戒」における羯磨

捨墮法第19条でも、金銀を捨てる比丘を選出するための白二羯磨が説かれている。比丘は利息を貰うために、金銀を貸したならば、その金銀は捨墮罪に触れることになる。その際、金銀の処置のための白二羯磨が、ここで説かれているのだが、その白二羯磨は、直前の捨墮法第18条に述べたものと全く同じであるため、その内容は省略されている (PTS. Vin. III 240.18)。

(20) 捨墮法第20条「種々販売戒」における羯磨

捨墮法第20条では、種々の物品⁽¹⁷⁾を返還することを告知するための白羯磨が説かれている。比丘は種々の物品を販売或いは交換したならば、その種々の物品は捨墮罪に触れることになる。そして、その種々の物品は捨墮法第1条に述べた手順と同じく為された後、この種々の物品を返還することを告知するための白羯磨が実施されて、捨墮罪を犯した比丘に返還される。この白羯磨は捨墮法第1条におけるものと「衣」が「種々の物品」に代わるだけで、殆ど同じであるため、その内容は省略されている (PTS. Vin. III 242.4)。

(21) 捨墮法第21条「畜長鉢過限戒」における羯磨

捨墮法第21条では、鉢 (patta) を返還することを告知するための白羯磨が説かれている。比丘が所有できる鉢の数は、基本的には、一つだけであり、それ以上の余分の鉢は「長鉢」 (atireka-patta) と呼ばれ、十日間に限って、所持することが認められている。十日が過ぎる

とその「長鉢」は捨墮罪に触れることになる。捨墮罪を犯した比丘は、その「長鉢」をサンガ、或いは数人の比丘達、或いは一人の比丘に対して、一旦放棄して懺悔をするが、サンガの場合には、有能で聡明な比丘が捨墮罪を犯した比丘の罪の懺悔を受けてからこの白羯磨を提唱して、その鉢を、捨墮罪を犯した比丘に返還する。このように、一旦放棄された鉢を、その放棄した比丘に返還するための白羯磨が、ここでは説かれている。その白羯磨は、捨墮法第1条におけるものと「衣」が「鉢」に代わるだけで、殆ど同じである。具体的な羯磨文は以下の通りである。

“suṇātu me bhante saṃgho. ayaṃ patto itthannāmassa bhikkhuno nissaggiyo saṃghassa nissatṭho. yadi saṃghassa pattakallaṃ, saṃgho imaṃ pattaṃ itthannāmassa bhikkhuno dadeyyā” ti (PTS. Vin. III 244.3-7)。

「大徳よ、サンガはお聞きください。某甲比丘の放棄すべきこの鉢が、サンガに放棄されました。もしサンガにとって時機適切ならば、サンガはこの鉢を某甲比丘に与えてください。」

(22) 捨墮法第22条「乞鉢戒」における羯磨

捨墮法第22条では、「行鉢人」(patta-gāhāpaka)を選出するための白二羯磨が説かれている。比丘の所有している鉢は、傷やひび割れが五箇所以上にならないければ、新たな鉢に代えることはできない。比丘は鉢の傷やひび割れが五箇所になっていない場合に、新鉢を乞い得たならば、その新鉢は捨墮罪に触れることになる。捨墮罪を犯した比丘は、その鉢を必ずサンガに(数人の比丘達や一人の比丘に、ではない)放棄し、懺悔をしなければならない。するとその後で、サンガからその鉢が捨墮罪を犯した比丘に返還される。しかしこの返還の方法は前述した捨墮法第21条におけるものと異なる。まずサンガの比丘全員が、平素使用している鉢を持って集合する。そこで有能で聡明な比丘がこの白二羯磨を提唱して、五つの支分⁽¹⁸⁾を有する比丘を「行鉢人」として選出する。この「行鉢人」である比丘は、放棄された新鉢を持って第一上座の比丘のところへ行き、「もしよければこの新鉢を取ってください」と言って、取ることを薦める。もし第一上座の比丘が新鉢を取れば、第一上座の比丘が使用していた鉢を持って第二上座の比丘のところへ行って、同じように取ることを薦める。このような仕方次第で最下座の比丘まで行って鉢の交換を行なう。そして最後に残った鉢が捨墮罪を犯した比丘に返還される。「行鉢人」を選出するための白二羯磨文は以下の通りである。

“suṇātu me bhante saṃgho. yadi saṃghassa pattakallaṃ, saṃgho itthannāmaṃ bhikkhuṃ pattagāhāpakaṃ sammanneyya”. esā ñatti.

“suṇātu me bhante saṃgho. saṃgho itthannāmaṃ bhikkhuṃ pattagāhāpakaṃ sammannati. yassāyasmato khamati itthannāmassa bhikkhuno pattagāhāpakassa sam-

muti so tuṇh' assa, yassa na kkhmati so bhāseyya.”

“sammato saṃghena itthannāmo bhikkhu pattaḡāhāpako, khamati (saṃghassa, tasmā tuṇhī, evam etam) dhārayāmī” ti. (PTS. Vin. III 247.3-10)。

「大徳よ、サンガはお聞きください。もしサンガにとって時機適切なら、サンガは某甲比丘を、「行鉢人」として選出してください。」

これが白（提議）である。

「大徳よ、サンガはお聞きください。サンガは某甲比丘を、「行鉢人」として選出します。

諸大徳の中で、某甲比丘を「行鉢人」として選出することを承認してくださる方は、そのまま沈黙を守ってください。承認しない方は発言してください。」

「サンガによって某甲比丘が、「行鉢人」として選出されました。（サンガは）承認しました。（沈黙が守られたゆえに。以上の通り、このことを私は）確認いたします⁽¹⁹⁾。」

(23) 捨墮法第23条「畜七日薬過限戒」における羯磨

捨墮法第23条では、薬 (bhesajja) を返還することを告知するための白羯磨⁽²⁰⁾が説かれている。病比丘は熟酥・生酥・油・蜜・石蜜という栄養のある食物である五種薬 (pañca-bhesajja) を七日間だけ保存しておいて、服用することができる。七日が過ぎたならば、その薬は捨墮罪に触れることになる。そして、その薬は捨墮法第1条に述べた手順と同じく為された後、この薬を返還することを告知するための白羯磨が実施されて、捨墮罪を犯した比丘に返還される。この白羯磨は捨墮法第1条におけるものと「衣」が「薬」に代わるだけで、殆ど同じであるため、その内容は省略されている。なお、捨墮罪に触れた薬は、捨墮罪を犯した比丘に返還されても、塗身用或いは食物として使用されてはならず、灯火用として使用されなければならない (PTS. Vin. III 251.31)。

(24) 捨墮法第24条「預前受用雨浴衣戒」における羯磨

捨墮法第24条では、雨浴衣 (vassika-sāṭṭika-civara) を返還することを告知するための白羯磨が説かれている。比丘は、雨浴衣を熱季の最後の月に乞い求めることが認められている。しかし、それ以前に乞い求めたならば、その雨浴衣は捨墮罪に触れることになる。そして、その雨浴衣は捨墮法第1条に述べた手順と同じく為された後、この雨浴衣を返還することを告知するための白羯磨が実施されて、捨墮罪を犯した比丘に返還される。この白羯磨は捨墮法第1条におけるものと「衣」が「雨浴衣」に代わるだけで、殆ど同じであるため、その内容は省略されている (PTS. Vin. III 253.22)。

(25) 捨墮法第25条「奪衣戒」における羯磨

捨墮法第25条では、衣を返還することを告知するための白羯磨が説かれている。比丘は、他の比丘に衣を与えておいて、後に怒って、与えた衣を奪回したならば、その衣は捨墮罪に触れることになる。そして、その衣は捨墮法第1条に述べた手順と同じく為された後、この衣を返還することを告知するための白羯磨が実施されて、捨墮罪を犯した比丘に返還される。この白羯磨は捨墮法第1条におけるものと同じであるため、その内容は省略されている (PTS. Vin. III 255.20)。

(26) 捨墮法第26条「自乞縷使織師作衣戒」における羯磨

捨墮法第26条でも、衣を返還することを告知するための白羯磨が説かれている。比丘は自分で糸 (sutta) を乞い求め、織師 (tanta-vāya) に衣を織らせたならば、その衣は捨墮罪に触れることになる。そして、その衣は捨墮法第1条に述べた手順と同じく為された後、この衣を返還することを告知するための白羯磨が実施されて、捨墮罪を犯した比丘に返還される。この白羯磨は捨墮法第1条におけるものと同じであるため、その内容は省略されている (PTS. Vin. III 257.3)。

(27) 捨墮法第27条「勸織師増縷戒」における羯磨

捨墮法第27条でも、衣を返還することを告知するための白羯磨が説かれている。親戚ではない在家者が、ある比丘に衣を布施しようと、織師に衣の作成を頼んだ場合に、そのことを聞いた比丘が織師のところに行って衣を長く、広く、厚く作るように指示して、衣を入手したならば、その衣は捨墮罪に触れることになる。そして、その衣は捨墮法第1条に述べた手順と同じく為された後、この衣を返還することを告知するための白羯磨が実施されて、捨墮罪を犯した比丘に返還される。この白羯磨は捨墮法第1条におけるものと同じであるため、その内容は省略されている (PTS. Vin. III 260.8)。

(28) 捨墮法第28条「急施衣受畜戒」における羯磨

捨墮法第28条では、「急施衣」(acceka-cīvara)⁽²¹⁾を返還することを告知するための白羯磨が説かれている。比丘は、自恣日になる十日前から「急施衣」を受けることができ、作衣時まで保管してよい。しかし作衣時が過ぎたならば、その「急施衣」は捨墮罪に触れることになる。そして、その「急施衣」は捨墮法第1条に述べた手順と同じく為された後、この「急施衣」を

返還することを告知するための白羯磨が実施されて、捨墮罪を犯した比丘に返還される。この白羯磨は捨墮法第1条におけるものと「衣」が「急施衣」に代わるだけで、殆ど同じであるため、その内容は省略されている (PTS. Vin. III 262.7)。

(29) 捨墮法第29条「有難蘭若離衣戒」における羯磨

捨墮法第29条でも、衣を返還することを告知するための白羯磨が説かれている。比丘は、雨安居が終わって、阿蘭若処 (āraññaka-sesāsana)⁽²²⁾に居る時に、盗賊の恐れがあったら、三衣のうち、いずれか一衣を在家者の家に、最長でも六夜間だけ預けることが認められている。しかし六夜間が過ぎたならば、その衣は捨墮罪に触れることになる。そして、その衣は捨墮法第1条に述べた手順と同じく為された後、この衣を返還することを告知するための白羯磨が実施されて、捨墮罪を犯した比丘に返還される。この白羯磨は捨墮法第1条におけるものと同じであるため、その内容は省略されている (PTS. Vin. III 264.15)。

(30) 捨墮法第30条「廻僧物入己戒」における羯磨

捨墮法第30条では、「得られた物 (lābha)⁽²³⁾」を返還することを告知するための白羯磨が説かれている。比丘は、信者がサンガの全員に布施しようと用意している物を自分一人に布施することを薦め、そしてその物を得たならば、捨墮罪を犯すことになる。そして、その得られた物は捨墮法第1条に述べた手順と同じく為された後、この得られた物を返還することを告知するための白羯磨が実施されて、捨墮罪を犯した比丘に返還される。この白羯磨は捨墮法第1条におけるものと「衣」が「得られた物」に代わるだけで、殆ど同じであるため、その内容は省略されている (PTS. Vin. III 266.10)。

以上、「パーリ律」捨墮法に見られる三十二の羯磨を説明した。これらは殆どの場合、捨墮罪に触れた衣・鉢・敷具・羊毛・雨浴衣・薬・金銀等の処置のための羯磨である。同じ捨墮罪でも処置の内容は異なる。衣・敷具・羊毛・雨浴衣は、捨墮罪を犯した比丘が懺悔をした後にサンガより白羯磨によってその捨墮罪に触れた物を返還してもらえる。ただし薬の場合はサンガから返還されても捨墮罪を犯した比丘は、塗身用或いは食物として使用してはならず、灯火用として使用しなければならないということになっている。金銀についてはアーラーミカ或いは優婆塞により熟酥・油・蜜・石蜜等と交換されるが、捨墮罪を犯した比丘の使用は認められない。また、アーラーミカ或いは優婆塞によって交換されなかった場合には、その金銀は捨てられることになる。鉢に関しては二つの羯磨も説かれている。一つは捨墮法第21条における羯磨であり、衣・敷具・羊毛・雨浴衣の処置の場合のように捨墮罪を犯した比丘に返還されるた

めのものである。もう一つは捨墮法第22条における羯磨であり、サンガ内での交換を経た後で捨墮罪を犯した比丘に（おそらくは別のものが）返還されるためのものである。このように、捨墮法に見られる諸羯磨は全部で三十二にのぼるが、その大半が同内容であり、その内容は殆どの場合、省略されている。故に捨墮法全体を通じて実際に説かれるのは

1. 衣を返還することを告知するための白羯磨
2. 「不失三衣許可」を与えるための白二羯磨
3. 病比丘に「敷具許可」を与えるための白二羯磨
4. 金銀を捨てる比丘を選出するための白二羯磨
5. 鉢を返還することを告知するための白羯磨
6. 「行鉢人」を選出するための白二羯磨

という六つの羯磨である。

結局、「パーリ律」捨墮法部分に説かれる羯磨は、三十二種と数えられるものの、実質的には六種にまとめられることになる。捨墮法の基本的性格が「所有してはならない物品への対応」であるため、いずれの場合にも「物品」をどのように「捨する」かが問題となるが、「パーリ律」はその全ての場合に羯磨によって対応すべきであることを明確に示している。従って、「パーリ律」捨墮法は、それぞれの羯磨と密接な関わりを有するものとして形成されていることになる。ただし、羯磨の具体的な内容を見た場合には、物品の名称を変えるだけで対応できる形式を整えており、律本文には省略された形で反復されているだけである。それが「パーリ律」固有の特徴であるのか、あるいは律蔵全体に共通するものであるのかについては、今回の検討のみで判断することはできない。今後は、「パーリ律」において確認された結果を土台として、他の広律に説かれる羯磨との比較検討を行い、それらを通して律蔵全体における「羯磨の研究」を継続していきたい。

〔注〕

- (1) 平川彰『二百五十戒の研究 II』春秋社、1993年、p. 47。
- (2) 例えば、佐々木閑『出家とはなにか』大蔵出版社、2005年、p. 73参照。
- (3) このような学処の名称は平川注 1 前掲書に従う。
- (4) 「作衣時」とは、比丘達が一年に一度、三衣を新調する時のことである。「パーリ律」において、「それは雨安居の後であり、もしも迦絺那衣を受けなかったならば一ヶ月間であり、もしも迦絺那衣を受けたならば五ヶ月間である」と説明されている (PTS. Vin. III 261)。
- (5) 「浄施」に関しては、山極は「[浄施]とは教団の規則である学処によって種々に制限されている事項を、特定のもとに適法化する手段である」と説明している（山極伸之「パーリ律健度にみられる浄法」『文学部論集』佛教大学文学部、2003年、p. 1）。また、平川は「浄施 (vikkappana) とは、比丘・比丘尼が信者から布施された物が規定を超過した場合に、超過した物を他の比丘 (比丘尼) に形式的に布施し、形式的に所有を放棄して、『規定以上に物を持つ場合

に陥る罪』に触れることを免れる便法である」と説明している(平川彰『比丘尼律の研究』春秋社、1998年、p. 341)。つまり「浄施」とは、金銭を除く余分の衣・鉢等を所有しても捨墮罪に触れないようにするための特別な便法なのである。余分の衣・鉢等を持っている比丘は、比丘・比丘尼・式叉摩那・沙弥・沙弥尼にその衣・鉢等を「対面浄施」或いは「展転浄施」という二つの方法で放棄して、その後、「浄施」を受けている者がその余分の衣・鉢等をもととの所有者(浄施を為した者)に返還する。そうすると、その余分の衣・鉢等は捨墮罪に触れないことになる。「浄施」或いは「浄法」については、次の論文等を参照。山極伸之「パーリ律経分別にみられる浄法」『香川孝雄博士古稀記念論集 佛教学浄土学研究』永田文昌堂、2001年、pp.203-221; 佐藤密雄『原始佛教教団の研究』山喜房佛書林、1963年、pp.577-663; 平川彰『律蔵の研究 II』春秋社、2000年、pp.324-342; 佐々木注(2)前掲書、p.277注(30)と「仏教における律蔵の役割」『戒律文化』創刊号、戒律文化研究会、2002年、p.12; 片山一良「パーリ仏教における相対的基準 [I] —kappiya の原義—」『駒沢大学仏教学部論集』第19号、1988年、pp. 492-510 と「四大教法 (cattāro Mahāpadesā) について」『パーリ学仏教文化学』第2号、1989年、pp. 55-68 と「パーリ仏教における相対的基準 [II] —kappiya とニカーヤ—」『駒沢大学仏教学部研究紀要』第47号、1989年、pp.252-268 と「十事 (dasa vatthūni) について」『パーリ学仏教文化学』第3号、1990年、pp.15-40; Jonathan Silk, The Origins and early history of the Mahāratnakūṭa tradition of Mahāyāna Buddhism with a study of the Ratnarāsisūtra and related materials (volumes I and II), The University of Michigan. 1994, pp. 215-254; Gregory Schopen, The Monastic Ownership of Servants or Slaves: Local and Legal Factors in the Redactional History of Two Vinayas, JIABS, 17-2, 1994, pp. 145-173。

- (6) PTS. Vin.: The Vinaya piṭakaṃ, Pali Text Society, By Luzac & Company, Ltd. 1964。
- (7) PTS 版では、白二羯磨の全文が示されているわけではなく一部が省略されている。本文中に掲げた括弧内のパーリ文は、内容を正確に理解するため、ビルマ版を底本とした以下のテキストから補ったものである。Vipassana Research Institute Edition (Dhammagiri-Pāli-Ganthamālā 87), Vinayapiṭake Pārājikapāli, 1998, p. 307.4-9。
- (8) これ以降で羯磨文が省略される場合に関しては、PTS 版、Vipassana 版ともに同じ形で省略を行っている。
- (9) 「過度の量の衣」については、「パーリ律」(PTS. Vin. III 214.29-32) では「もし三衣が失われたならば、二衣を乞い求めるべきである。二衣が失われたならば、一衣を乞い求めるべきである。一衣が失われたならば、何も乞い求めるべきではない」と説明されている。
- (10) 「衣料」に関しては、平川は「衣料」は、漢訳では「衣直」「衣価」等と訳しているが、これは必ずしも「金銭」を指すのではない。金銭もその中に含まれているが、それ以外に、金・銀・宝石・錦・穀物等も衣料となるのである」と説明している(平川注(1)前掲書、p. 167)。
- (11) 「執事人」とは「パーリ律」(PTS. Vin. III 221.26) において「執事人はアーラーミカ或いは優婆塞である」と説明されている。また松田は「在家信者でサンガの為に奉仕する者」と説明している(松田真道「執事人 veyyāvaccakara と守園人 ārāmika」『印度学仏教学研究』59

- (30-1)、1981年、pp. 124-125) が、その実体については不明な点も多い。詳しくは次の論文等を参照。山極伸之「律蔵にあらわれる ārāmika」『印度学仏教学研究』94 (47-2)、1999年、pp.173-178；松田真道「インド仏敎教団史における浄人の考察」『曹洞宗研究員研究生研究紀要』14曹洞宗宗務庁、1982年、pp. 137-154；Silk 注(5)前掲書；Schopen 注(5)前掲書。
- (12) 捨墮法第2条の場合と同様に、PTS 版では白二羯磨の全文が示されているわけではなく一部が省略されているため、Vipassana 版によって、内容を補った。注(7)前掲書、p. 346.4-9。
- (13) 「金銀 (rūpiya)」に関しては、平川は「rūpiya とは金と銀、或いは金銀錢を意味すると理解してよいのである」と説明している (平川注(1)前掲書、p. 343)。
- (14) 「アーラーミカ」に関しては、山極は「沙弥と並んで、比丘が行なうことの出来ない種々の作務などを比丘に代わって行なうことを主たる役割とする者」と説明している (山極注(11)前掲書、p. 173) が、その実体については不明な点も多い。詳しくは次の論文等を参照。松田真道「インド仏敎教団における在俗者 ārāmika の考察 (序)」『宗教研究』246 日本宗敎学会、1981年、pp.264-265 と注(11)前掲書；Silk 注(5)前掲書；Schopen 注(5)前掲書。
- (15) 五つの支分とは以下の通り (PTS. Vin. III 238.24-28)。
1. 不応行である貪欲に行かないこと
 2. 不応行である瞋恚に行かないこと
 3. 不応行である愚痴に行かないこと
 4. 不応行である怖畏に行かないこと
 5. 捨と不捨とを知ること
- (16) この部分も、PTS 版では白二羯磨の全文が示されているわけではなく、一部が省略されているため、Vipassana 版によって内容を補った。注(7)前掲書、p. 358.1-5。
- (17) 「種々の物品」に関しては、「パーリ律」(PTS. Vin. III 241.30)において「衣・飲食・臥具・病気のための資具である薬・団子・楊枝・未織の糸までを言う」と説明されている。
- (18) 五つの支分とは以下の通り (PTS. Vin. III 246.34-247.1)。
- 1 から 4 までは注(15)と同じである
 5. 取と不取とを知ること
- (19) この部分も、PTS 版では一部が省略されているため、Vipassana 版によって内容を補った。注(7)前掲書、p. 370.11-12。
- (20) 七日薬の処置については、平川は「捨墮罪に触れた七日薬は、『パーリ律』や『四分律』によれば、僧伽に捨するか、衆多人 (二、三人の比丘) に捨するか、一比丘に捨するかするのであり、僧伽に捨すれば、その後、懺悔をなす。僧伽に受理された薬は、さらに本人に還与される。これは僧物になったものを一比丘に与えるのであるから、白二羯磨によってなされる」と説明している (平川注(1)前掲書、p. 450)。しかし本論中に示したように「パーリ律」では捨墮罪に触れた薬を捨墮罪を犯した比丘に返還するための羯磨は白二羯磨ではなく白羯磨である。白二羯磨での返還は「パーリ律」ではなくて『四分律』において説かれている。
- (21) 本来ならば、比丘は、雨安居が終わる時に、信者から布施される衣を受けることができるのであるが、信者に急用があって、その者が雨安居が終わるまで待つことができない場合には、前

もって衣を布施することができる。この場合の衣が「急施衣」と呼ばれる。

- (22) 「パーリ律」(PTS. Vin. III 263.31)・『五分律』(T.22, 133a18)では「蘭若処とは村から最小五百弓離れている処である」と規定されている。また佐々木は「アランヤとは、町や村落を中心として周囲、半径一キロメートル程度の範囲の外部を指す」と説明している(佐々木閑「アランヤにおける比丘の生活」『印度学仏教学研究』102(51-2)、2003年、p. 807)が、その実体については不明な点も多い。詳しくは次の論文等を参照。平川注1前掲書、p. 565；坂詰秀一「阿蘭若処を伴う伽藍」『日本仏教史学』第14号 日本仏教史学会、1979年、p.23)；下田正弘「阿蘭若処に現れた仏教者の姿—倫理的自制型と呪術的陶醉型—」『日本仏教学会年報』63号 日本仏教学会、1997年、p. 7, pp.10-21; Reginald Ray, *Buddhist Saints in India, A Study in Buddhist Values and Orientations*, Oxford University Press, Newyork. 1994。
- (23) 「パーリ律」(PTS. Vin. III 266.9)では「lābha」と書かれているだけで詳しい内容は規定されていない。ここでは一旦、「得られた物」と訳しておく。

(タン ヴァン ヴァン 佛教大学研究員)

(指導：並川 孝儀 教授)

2008年9月30日受理